

元気な
山形
会員企業



〈(株)ヤマコン〉
設立1966(昭和41)年3月。資本金9,000万円。会長佐藤勝彦、代表取締役社長佐藤隆彦。グループ総従業員315名。コンクリート圧送事業の国内パイオニア。1979年、国内最大手の規模に。圧送工事と共に集合住宅を中心とした給・排水管リノベーション市場に参入。社是は「圧送事業を通じて、人格の涵養と技術の錬磨に励み、豊かな社会造りに貢献する」。本社は〒990-2211 山形市十文字宇天神東770。☎023-666-6066。関連会社(株)サニックス。(写真はベトナム大手の建設会社VIMECO社と業務提携を結ぶ佐藤会長=右から3人目と1人おいて佐藤代表取締役社長)

コンクリート圧送業を草創期からリード、国内最大手の企業が山形市にある。(株)ヤマコン。国内初のブルム脱着型ポンプ車など最先端の建設機械を導入するとともに、「企業づくりは人づくりから」を信念に従業員全員を正社員雇用。マイスター制度、独自の技能五輪開催を通じて、顧客に最高のサービスを提供する技術者集団を目指している。創業50周年。設備リニューアル市場にも参入する業界の老舗の足跡と今後の取り組みを紹介する。



半世紀前に登場したコンクリートポンプ車の第1号

田口連三氏の檄、経営者結束
前身の山形コンクリートサービス(株)が設立されたのは、1966(昭和41)年のこととなる。その1年前、東京五輪の興奮冷めやらぬ夏、山形の実業人20数人が緊張した面持ちで石川島播磨重工業(株)(現・IHI)社長田口連三氏の到着を待っていた。田口氏は天童市高橋の出身。現在の県立山形工業高校、米沢高等学校(現・山形大学工学部)卒業後、石川島造船所に入社。常務、副社長を経て社長に就任、東京商工会議所副会頭の要職にあった。

ポンプ車の出現は画期的だった。田口氏の言葉に触発され山形市内の建設業者、銀行の主だった経営者が、コンクリート打設専門の会社設立に動き出した。ポンプ車は当時の金額で980万円。一企業100万円、資本金1千万円が最低限必要。設立準備会の主だったメンバーが、名古屋で開催された見学会に参加した上で、県内建設業者の賛同得るため、七日町のレジヤセンタービルで公開試験打設を行った。デモンストラーションは大成功。さらに、「郷土の建設」と題した自主番組を半日間、山形放送から放映した。こうして山形ガス燃料社長中村喜兵衛氏が社長に新会社が産声を上げた。

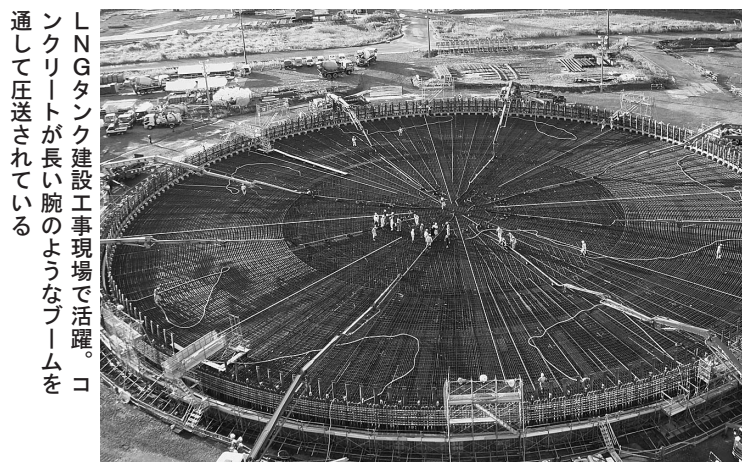
佐藤現会長、経営トップに
華やかなスタートを切ったものの、社員はわずか5人。加えて初期のポンプ車は不具合も多く現場は苦勞の連続だった。経営も順調とは行かず5年間赤字続き。常務として設立当初から社員と共に汗を流した佐藤会長が2代目社長となり本格的に経営に乗り出した。本社を郊外に移転し社員を増員。また、他社が開発した優れた新機種を導入した。高度成長



(株)ヤマコンが導入した最新鋭のコンクリートポンプ車。独ブツマイスター社製。38メートルスーパーロング



会議所主催のジュニア・インターンシップで高校生に企業PRする女性社員



LNGタンク建設工事現場で活躍。コンクリートが長い腕のようなブームを通して圧送されている

創業50周年 確かな技術

の波にも乗り、社長就任8年後の1978(昭和53)年、日本一の圧送業者に成長。1995(平成7)年、グループ4社を統合し(株)ヤマコンとしてスタートした。
建設業の一翼を担うようになったが、圧送業の社会的地位は低かった。責任を外部に求めるのではなく、自ら向上、研鑽を怠らなければならぬと決意、若手社員の勉強会を開催した。圧送技術の向上はもとより時事、経済問題を取り上げた。コーポレートカラーを制定し、コンクリートポンプ車の色を、燃える赤いポンプ車集団をイメージした「ヤマコンレッド」とした。
営業拠点をネットワーク化
佐藤隆彦代表取締役社長は大学卒業後、清水建設に入社、北陸支店で10年間勤務。現場経験に加えて財務経理に携わった。2005年社長就任した。パブルが崩壊し最も厳しい時代で、何とか会社を継続させなければ、との思いで取り組んだのがエリア制の導入。目指したのは権限と責任の委譲。それぞれの地域で責任を持ってマーケットを分析し、経営戦略を立案できる組織にしたいと考えた。戦略に込めるかのように関東エリアが、それまでの土木一辺倒から建築・土木両方の仕事を受注。この結果、東北が厳しい時代に首都へ